

測天量地の先駆者 伊能忠敬

戸村 茂昭

初冬の つるべ落としの 夕まぐれ
丑寅なる地平線に現れた
地球の陰なる 滅紫の夜の帳
「天頂まで覆いつくしたかな？」
と見上げたその瞬間
天翔ける天馬の姿で現れた
ペガサスの星々

彼 伊能忠敬はその瞬間
いつもどおり 冷静に
「危宿一 まもなく南中！」
続いて、危宿二 南中！ 測天 準備！
二星を測ると 一転にわかにかに 群雲 巻き起り
星々を覆いつくした
やむなく測天(天体観測)を中断

「地図を詳しくしたため候術は
第一は北極出地度(緯度)、
その次は方位に御座候

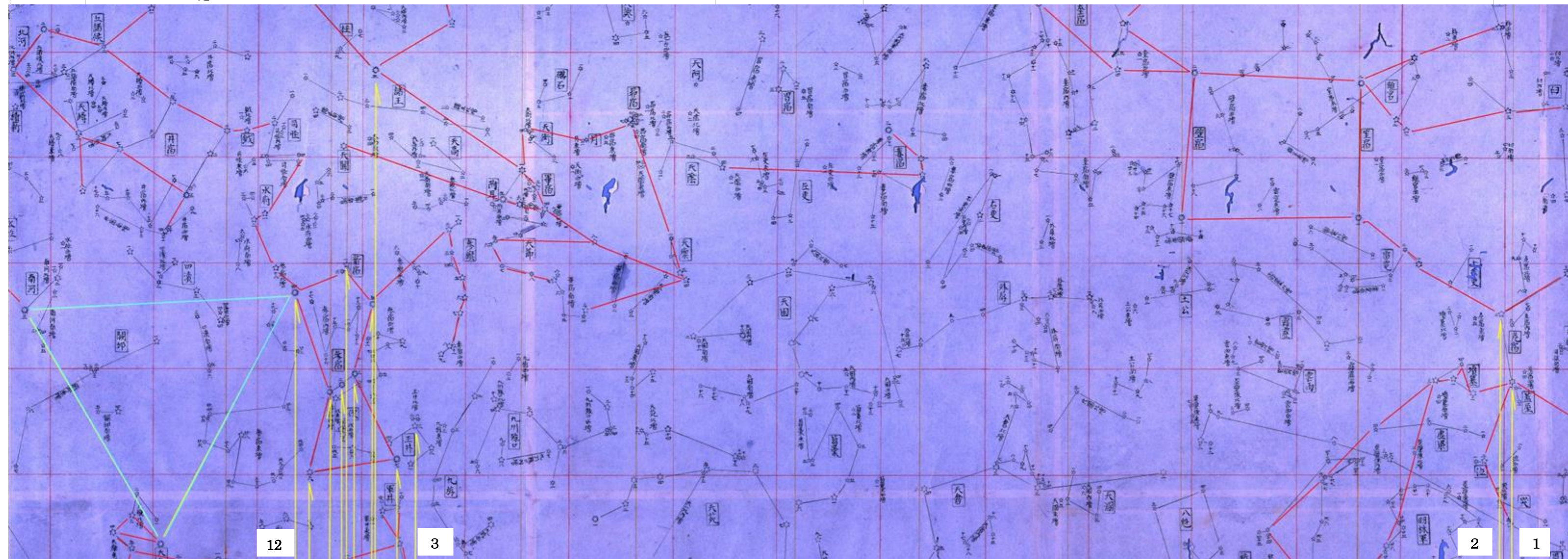
北極出地度の儀

恒星中の大星を選び
天気曇り、見えがたき節は五、六星
晴天の夜は二〇〜三〇星
それぞれ南中時の地高度を測り、
予め測り置きし赤道緯度とにより
求めるなり」

測天の中断

未明に至り、
オリオン星座 舞立ち
彼 伊能忠敬は 再び肅々と
「玉井三、参宿七、五車五、参宿五、参宿三、觜宿一、
参宿二、参宿一、参宿六、参宿四 それぞれ まもなく、
南中に及べり 測天再開 準備！」

かくして、伊能忠敬は
シニア世代の十七年に亘って
日本全国津々浦々を巡り、
星を鏡として 瑞穂の国アキツシマの島影を写し取った
それを「大日本沿海輿地全図」として完成の上
幕府に上呈
それは、今を遡ること 二百年前の偉業



伊能忠敬「大方星図」(千葉県香取市伊能忠敬記念館蔵)より筆者加工 数字は観測順(4~11省略)

*一 当時の星の名称 測量地点は陸奥国柴田郡舟迫村(国立国会図書館『測地度説』第3冊「於舟廻測之」より)
*二 『伊能忠敬測量日記』寛政12年閏4月5日・同年10月28日